侵略的日本語教育と国際交流のための日本語 ①

天理教語学院
日本語教育センター主任
大内　泰夫　*Yasuo Ouchi*

日本語教育の歴史

日本語教育史は大きく分けて、次のように３期に分類されている（関正昭『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク、1997 年、５頁）。

① 外国人主体の日本語学習・日本語研究の時代（19 世紀末以前）
②「侵略的」日本語普及教育の時代（19 世紀末～ 1945 年）
③ 国際交流のための日本語教育の時代（戦後～現代）

17 世紀前半のキリスト教宣教師団の布教を目的とした日本語学習や、19 世紀半ばから始まったヨーロッパの大学での日本語・日本研究などが、①に当たる時代である。その後、19 世紀から覇権を目指した日本語普及政策で台湾、朝鮮、中国大陸などアジアの国々で日本語教育が行われた時代が、②の侵略的日本語普及教育の時代である。第２次世界大戦後、とくに 1950 年ごろからは学術・文化交流・経済協力のための日本語教育として行われ、現在に続いているのが③の時代である。

筆者は戦後生まれであるから、当然、③の時代しか実体験していないのだが、学生時代に経験したエピソードを紹介しながら、②と③の時期について考えるところを述べてみたい。

近くて遠い国

1983 年、当時筆者は天理大学外国語学部朝鮮学科で韓国語を学んでいた。この年の春休み、同級生３人と韓国旅行の計画を立て、釜山、慶州、ソウルと回ってきた。気軽な気持ちで出かけた初めての韓国旅行であったが、自分の人生において大きなターニングポイントになった旅であったと感じている。釜山では、モントリオールオリンピック柔道の銅メダリストである趙在基先生が東亜大学校日語日文学科の学生を紹介してくださった。趙先生は柔道で交流のあった天理大学へ留学されていた時期があり、その関係者からの紹介で筆者たち４人を受け入れてくださった。当時は全斗煥大統領の時代で、大阪領事館へビザを取りに行かなければならず、パスポートだけで自由に旅行ができる時代でもなく、「近くて遠い国」とも言われていた。また韓国の人も、海外旅行が自由にできなかった時代でもある。

思い返せば、筆者が日本語教育の道に進んだルーツはここにあるのかとも思える。釜山では東亜大学校日語日文学科の学生たちが日本語でいろいろなところを案内してくれた。我々が韓国語を専攻しているということで、「我が国の言葉を勉強してくれてありがとう」ととても親切にしてくれた。また我々に会って日本に対する意識が変わったと言ってくれる者もいた。当時のエピソードには事欠かないが、なかでも「軍隊（自衛隊）にはもう行きましたか？」と問われた時に、筆者が「いいえ」と答えると「どこか体が悪いのか？」と返され、答えに窮したことがある。そもそも常識が違うことを肌で感じた。また、初めての異文化接触に戸惑うことも多々あった。直線距離では大阪から青森へ行くより近い釜山だが、外国に来ていることをあらためて感じることばかりであった。東亜大学校の学生との交流から、自分たちがあまりに韓国のことを知らなさすぎると痛感した。

いま、筆者たち４人に会って、日本に対する意識が変わったと言われたと書いたが、韓国人の側でもまた、日本人と言えば「怖い人たち、国を奪った悪い人たち」という教育を受けてきているのだと感じた。それが実際に日本の若者と会って日本語と韓国語で話し合ううちに、いろいろと認識が変わっていくことがあったようだ。彼らとの会話の中でお互いの国の教育が大きく影響していることも、後によくわかった。国語の教科書でも歴史の教科書でも日本に関することにたくさんページが割かれ、反対に日本の教育では近代の歴史の中で韓国に関することはわずか数行ばかり書かれているような状況であったから、認識の違いがたくさん起こることも無理はなかったのかもしれない。語学も含め、教育というものがどれだけ大切なものかを考えさせられる。

流暢な日本語

東亜大学校日語日文学科の学生たちと釜山のバスターミナルで涙のお別れをして、筆者たち４人は歴史文化都市である慶州へ向かった。慶州は日本の奈良・京都のような世界遺産に登録された遺跡もあるところである。石窟庵、仏国寺などを回り、国立慶州博物館、天馬塚古墳へ行った時のエピソードだが、一人のおじいさんが流暢な日本語で話しかけて来た。韓国人が第二言語として習った日本語という感じではなかった。聞けば古墳を案内するから、帰りによかったら息子がやっている土産物店で何か買って行ってくれればとのことで、案内を申し出てくださった。慶州に来る前に、釜山では同じ年代の日本語を勉強する韓国の大学生たちと交流していたが、彼らが話す日本語とは明らかに違うネイティブ話者のような日本語であった。

写真　慶州・天馬塚の前で（右端筆者）

タイムマシンがあれば、その時に戻って案内してくれたおじいさんにどんな教科書でどのような授業の様子だったか、当時の日本語教育についていろいろ聞いてみたいとも思うが、今となってはどうしようもない。『日本語教育史研究序説』（19 頁）では、「1905 年に第二次日韓協約によって日本の保護国になり、翌年には統監府が設置された。教育制度が改編され、普通学校（小学校相当）、高等学校（中学校相当）で日本語教育が行われた」とあり、続いて「1910 年に日韓併合がなされると『日語』は『国語』と改められ、植民地教育政策の根幹としての『国語教育』＝朝鮮の国語としての日本語教育が強行された」とある。つまり外国語教育としての日本語ではなく、国語教育としての日本語を習っていたわけで、先のおじいさんはまさにその時代を経験してきたのだと思われる。